十勝毎日新聞
2005年（平成17年）7月5日（火）

都市エリア産学官連携促進事業が始動

ポイントは「売れる製品」

科学技術コーディネーター 佐山晃司氏に聞く

函館に続き道内2例目となる「都市エリア産学官連携促進事業」が十勝で始動した。函館では産学官連携の〝起爆剤〟となり、道のリサーチ&ビジネスパーク（R&B）構想の地方展開地区となるなど成果を上げているだけに、十勝でも関係者の寄せる期待は大きい。同事業推進委の座長を務め、事業成功のカギを握る佐山晃司科学技術コーディネーター（69）に意気込みなどを聞いた。（田島土幸）

「十勝農業に貢献したい」と抱負を語る佐山コーディネーター

―事業のポイントは。

大事なのは地域振興にどう役立つかと、「製品化」の視点。今回ナガイモの機能性食品開発など5テーマで取り組むが、研究で製品を開発して終わらせるのではなく、消費者ニーズの市場調査も行い「売れる製品」を目指す。採算性を意識する。参加する民間企業に「利益になる」と思わせなくては事業は進まない。自分も研究畑出身なのでよく分かるが、研究者は自分だけの世界で研究にのめり込みがち。

整腸作用を持つビートオリゴ糖「ラフィノース」の営業に携わった時は当初、在庫の山で頭を抱えた。実験データが良くても必ず売れるわけではない。営業の場にも出向くなど努力を重ね乗り切ったが、売ることは大変だと骨身に染みた。

▽都市エリア産学官連携促進事業＝大学を核に民間企業・公的機関が協力して地域特性を生かした新技術開発・新規事業創出を図って地域振興を目指す。文科省の所管事業で研究資金は3カ年で約3億円。十勝のテーマはナガイモなど農畜産物の機能性食品の開発。帯畜大を中核研究機関、十勝圏振興機構が事務局を務める。

▽北大R&B（リサーチ・アンド・ビジネスパーク）構想＝道が国の大型プロジェクトなどを活用して進め、研究開発から事業化までを産学官が協働で行う。北大を核に取り組む札幌のほか、地方展開として函館でも進め、帯広など道内4都市が候補地に挙がっている。

―十勝の産学官連携の現状は。

他の地域に比べ非常に高いポテンシャルを持つ先進地。バイオエタノールなど農畜産物関連は高い評価を受けさまざまなテーマの研究が進むが、事業化まで至っていない「もう一歩」の状態だ。今回の事業を突破口に地場産業を育て、食料供給基地から脱皮しなければ地域間競争に生き残れない。

―先行する函館の事例から学ぶことは。

函館が短い期間で地元の素材を使って製品化できたのはテーマを絞り込めたことが大きい。従来価値がないとされてきたガゴメコンブに注目してせっけんなどの商品化に成功している。成果の出る可能性の高いテーマから優先的に取り組みたい。

―今後の意気込みを。

3年は決して長くない。1口でも早く事業化・製品化させなくてはならない。地域の力を結集して、できれば道のR&B構想の足掛かりになれば。推進委の中で最年長という老骨にムチを打って頑張りたい。

プロフィル▽1935年、札幌市生まれ。58年に北海道大学農学部卒業後、日本甜菜製糖に入社。93年から同社総合研究所長、2001年に退任。ビートに含まれるオリゴ糖から機能性食品を開発、市場を開拓してきた経験などを買われ、科学技術コーディネーターに就任した。帯広市在住。

食料供給基地から脱皮を